

松尾芭蕉（田原の滝公園）

1682年の冬、江戸で大火があり、家や財産を失った数千名の中に、有名な俳人、松尾芭蕉（1644～1694）がいました。火事後、家を失った芭蕉は、この地を統治していた大名の家老である、弟子の高山伝右衛門に招待されて、谷村（現在の都留）へ旅に出ました。ここで過ごした5か月の間、芭蕉と高山は何度も句会を開き、その間、数多くの今なお有名な句が詠まれました。早春に田原滝を訪れた際には、大地に戻る生命力を想起させる、次の句を書きました。

There are signs of life: 勢いあり

The icicles thawing and 氷消えては

The fish in the falls 瀧津魚

田原の滝公園には、この句が刻まれた石碑があります。同じような句碑は市内のいたる所にあり、それぞれに芭蕉がその地で詠んだ歌が刻まれています。

芭蕉は、生涯のほとんどをかけて、国を旅し、句を詠んだ旅人として知られています。谷村で過ごした5か月が、成人後に江戸深川に次ぎ1箇所でも過ごした最も長い滞在であり、この地の自然の美しさへの芭蕉の深い感動の証であるという人もいます。